

聖書：使徒 22：1～22

説教題：義なる方を見させ

日時：2014年7月20日

パウロはエルサレムでなわめと苦しみが待っていると予告されて来ましたが、果たしてその通りとなりました。殺到したユダヤ人によって捕らえられ、打ちたたかれ、一歩間違えば死に至りかねない状況でローマ兵によって救われ、兵營に連れて行かれようとしていました。その時、パウロは「一言お話してもよいでしょうか」と許可を取り、ユダヤ人に向かって語り始めます。その内容がこの22章前半です。パウロはここでユダヤ人に対して自らが伝えている福音について語ります。この弁明は大きく3つの部分に分けて考えることができます。

最初に語られているのは過去のパウロについてです。3～4節には彼の立派な経歴が述べられています。彼はタルソ生まれのユダヤ人でしたが、「この町で育てられ」ました。すなわち早い段階でエルサレムに連れて来られました。そして有名なガマリエルの門下生となります。その先生のもとで先祖の律法について厳格な教育を受け、皆さんと同じように神に対して熱心な者だったと言います。すなわち律法を細心の注意を払って遵守する生活を送っていた。さらにパウロはこの道を迫害しました。すなわちキリスト教信者たちを迫害しました。男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らしめたと言います。このことについては証言してくれる人たちもいると言います。大祭司も、長老たちの全議会も。パウロはこの人たちから手紙を受け取り、言わば公的な立場でキリスト者狩りを行なったのです。その熱心はエルサレムやユダヤ地方ばかりでなく、ずっと北方のダマスコにまで追跡していくという姿に現れました。

そんなパウロがなぜ変わったのでしょうか。二つ目にパウロはダマスコ途上における復活の主との出会いについて語ります。旅を続けてダマスコに近付いた真昼ごろ、突然天からまばゆい光が彼を照らします。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声を聞きます。それは何と十字架につけられ、弟子たちが復活したと宣べ伝えていたナザレのイエスであった！パウロは主の言葉に従って、ダマスコの町へと入って行きます。目は光の輝きのために見えない状態になっていたもので、一緒にいた人たちに手を引かれながら。そうして律法を重んじる敬虔な人で、そこに住むユダヤ人全体の間で評判の良いアナニヤという人を通して、主の導きを受けたのです。アナニヤはパウロに言いました。14～15節：「私たちの父祖たちの神は、あなたにみこころを知らせ、義なる方を見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定めになったのです。あなたはその方のために、すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人とされるのですから。」アナニヤによれば、この出来事は神のご計画によるということでした。その神はパウロに義なる方を見させ、その方の口から御声を聞くようにと計画なさり、今そのことを実行に移された。それはこのキリストについてあなたが人々に宣べ伝える生涯を送るためである、と。後にもう少し見ますが、ここでイエス・キリストを指して「義なる方」と言われています。すなわちこの方こそ、神の前での真に「義」なる方なのです。言い換えれば、律法を一生懸命守り、神に対して熱心に歩んで来たパウロは全然義なる者ではないと

ということです。自分が誇りとして来た義など、全く頼りにならないものであることがはっきり分かった。そこでパウロはアナニヤに導かれて自分の罪を洗い流すバプテスマを受けます。自分の義によって立てるところか、救われなければならない罪人であることが分かったのです。

そしてパウロが語る3つ目のことは、エルサレムの宮で祈っていた時のことです。彼は主から「急いでエルサレムを離れよ！」と言われます。「人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないから」と。パウロは自分の意見を述べます。「主よ。人々は私が以前どんなにキリスト教に反対する活動をしていたかを良く知っています。ステパノの血が流された時も、私はそこに加わっていました。そんな私がこのように変わったと証しすれば、人々はより良く耳を傾けてくれるのではないのでしょうか。」と。しかし主は言われました。「行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす。」と。この言葉が語られた瞬間、人々は騒ぎ出し、混乱状態に陥ります。これによってパウロの弁明はさえぎられる形で終わりとなります。人々は「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」と言ってわめきたて、收拾がつかない状態となります。

なぜユダヤ人たちはこのように反応したのでしょうか。このことをもう少し考えて行きたいと思います。彼らはパウロの口から「異邦人」という言葉が出た時に、騒ぎ始めました。すなわち彼らは、異邦人もそのままで自分たちと同じ救いにあずかることができるというパウロの福音が受け入れられなかったのです。もしそれが本当なら、ユダヤ人も異邦人も同じ立場に立つこととなります。犬と呼んで軽蔑していた異邦人と自分たちが同じであることになってしまう。そのような考えは到底受け入れられない。それにパウロが言うところによれば、自分たちが一生懸命律法を守って生きていること、その努力も実践も何ら勘定に入れられないこととなります。そんなバカな話があるか！というのがユダヤ人の考えだったでしょう。彼らは異邦人に救いの門を閉ざしているわけではありません。異邦人がユダヤ人に帰化して救いに入ってくることは良い。しかし異邦人のままで、ただ信じるだけで、神の民・救いの民に入れるという考えが我慢できなかった。彼らはユダヤ人の民族的優位性、また神の律法を持ってこれに従って生活しているという道徳的優位性をきちんと区別して欲しかった。それによってより神に近く、より神の前に正しい自分たちの立場を高く保って欲しかった。しかしそれは成り立つ主張なのでしょか。

ローマ 10 章 1～4 節：「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」ここにユダヤ人を指して「彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかった。」とあります。彼らは「神の義」すなわち神が下さる義を脇に退けて、自分自身の義を立てようとした。すなわちそれは律法を守ることによって自分を正しいとする義です。一例として、ルカの福音書 18 章にあるパリサイ人の祈りに出て来る「私はほかの人のようにゆする者、不正な者、姦淫する者で

はないことを感謝します」といった自負心、また「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」といった自負心をあげることができます。しかしこういった義は神の前に通用するものなののでしょうか。イザヤ書 64 章 6 節：「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」パウロもそのことに目が開かれました。彼はピリピ書 3 章でかつて自分が誇りとしていたものを振り返ってこう言っています。「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」しかし、その後で今やキリスト・イエスを知っていることの素晴らしさのゆえに、それらを「ちりあくた」と思っている、と言っています。これは排泄物や食卓の残り物、くずなどを表す言葉です。パウロは本物の「義なる方」を見た時、すなわちダマスコ途上で栄光のイエス・キリストにお会いした時に、初めて自分が積み上げてきた義は全然「義」と呼べるようなものではないことが分かったのです。千葉にいた時、私たちが住んでいた家の前の道路に時々うんちが落ちていた時がありました。きつと犬の散歩をした人が落としていったものでしょう。そんなものが玄関前にあるのを見るのはもちろんイヤです。ウワー、汚ない！大変だ！と大騒ぎをして片付けます。しかし私たちはそのようなものを神の前に平気で持って行っているということです。そして「神様どうでしょう。きつとあなたはこれを喜ばれることと思います。」と言っているようなものである。あるいは生活のごみをまとめて出す日がありますが、そのごみ袋を神の前にたくさん積み上げて、「神様、私はこれだけ、私の義を持ってきました。いかがでしょうか。」と言って、お褒めの言葉をもらえるかと期待するようなものです。

しかし私たちが義を持つようになる道として、もう一つの道がありました。それは「神の義」に従うということです。この神の義とは「神がイエス・キリストによって罪人にプレゼントして下さる義」のことです。この神の義の基礎となるのは、イエス・キリストこそが義なる方であるということです。この方こそ神の律法を完全に守り、神の前に全く正しいと認められる唯一の方です。パウロはその「ザ・義なる方」イエス・キリストにダマスコ途上で会いました。その方のまばゆい光の前に倒れました。それはパウロにとって頭を激しく打たれるような経験だったでしょう。なぜ十字架の呪いの木につけられて死んだはずのイエスが、このような義なる方なのか。そしてそこから分かったことは、この義なる方の十字架の死はご自分のための死ではなかったということです。それは罪人の身代わりを果たすための死であった。何と自分のような罪人を救い出すために、義なる方が尊い身を投げ出して測り知れない代償を払ってくださった。そのことによって、この私のとてつもなく深い罪も全く赦していただける世界が開かれた。そればかりかキリストはご自分により頼み、ご自分と結ばれた者に、ご自身の完全な義にあずかせてくださる。これが神の義です。これは信じるすべての人に与えられます。ですから異邦人もそのまま、この方を信じる信仰を通して義とされるこの祝福にあずかることができます。

私たちはどんな義を持って神の前に出ようとする者でしょうか。私たちはやがて一人一人、

神の前に立って自分の歩みについて弁明しなければなりません、神は一つの罪もない、完全に義なるお方ですので、私たちも全く落ち度のない義を持っていなければ、この方の前に立ち続けることはできません。またその後で神がご自分の民を導き入れて下さる天の御国も、Ⅱペテロ 3 章 13 節で「正義の住む新しい天と新しい地」と言われています。私たちはそこに入る者となるのか、それともそこに入れずにさばかれる者となるのか、どちらかしかありません。そのことが決められる最後の日に向かって、私たちはどのような義により頼む者でしょうか。私たちがより頼む自分自身の義は、先に見たようにどれも不潔な着物のようです。人の中でどんなに称賛されても、神の前では異臭を放つゴミの山、ちりあくたでしかありません。それらは自分の救いのために何の役にも立たないものです。しかし私たちにとっての福音は、完全に義なるお方がおられて、その方がご自身の十字架を通して、私たちの罪を全く赦して下さるということ。そればかりか信じる者をご自身の完全な義をも持つ者として下さるということです。パウロがこの義なる方に出会い、義なる方を見つめて、自らが義とされる光の中を歩む祝福へと導かれて行ったように、私たちもこの義なる方を見つめ、仰ぐ者とさせられたいと思います。そして自分自身の頼りにならない不潔な義によってではなく、この義なる方を通して与えられる完全な義によって、やがての正義の国へと至る「神の義」の光の中を歩む者へ導かれて行きたいと思います。